

令和 2 年 9 月 11 日現在

機関番号：32641

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13158

研究課題名(和文)シク教団形成者アマルダスに見る異教徒との共生思想

研究課題名(英文)A Study of the Symbiotic Thought of Amardas, a Sikh Religious Organizer

研究代表者

保坂 俊司(hosaka, shunji)

中央大学・国際情報学部・教授

研究者番号：80245274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：シク教は、ヒन्दウー・イスラム両教の融和を目指して16世紀の西北インドに生まれた宗教である。以来、両宗教の緊張関係の中で、独自の融和思想によって当該地域の社会的な平和構築に貢献してきた。特に、シク教の融和思想は、第三代のアマルダスにより組織化されシク教団として確立された。しかも、シク教団の発展史は、文献的に明確化できるために、シク教研究のみならず、他の宗教のサンプル研究ともなる点で重要である。今回は、小さな理想主義的初期のシク教団が、巨大教団へと発展するその過程をアマルダスの思想を中心検討した。更に宗教の融和思想の比較研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シク教は最も新しいインド発の世界宗教である。このシク教教団が世界宗教に発展するための基礎を築いたのが、第三代グルのアマルダスである。シク教研究の上で、アマルダスの存在は、その融和思想と社会的な共生思想研究で、非常に重要であるがさらに重要なことは、シク教教団の発展の歴史が、文献によって明らかとなる点である。この点でシク教の研究は、他の古い宗教研究の発達史の研究のサンプル研究となる。その点で、特にシク教団の基礎を確立したアマルダスの存在の意義は大きい。今回の研究は、小さな宗教が世界宗教に成長するその基礎を明らかにする基礎研究である。

研究成果の概要(英文)：Sikhism is the religion born in the 16th century northwest India that aiming at harmony of Hindu Islam two religion. Since then, in the tension between the two religions, it has contributed to the social peacebuilding with its own though of harmony. In particular, the Sikh religion thought was embodied by the third guru Amaldas and established as a Sikh cult. Moreover, the history of the development of the Sikh sect is important not only as a study of Sikhism but also as a sample study of other religions because it can be clarified in the literature. In this study, we examined the process of the small idealistic Sikh cult to develop into a huge cult, focusing on the thought of Amaldas.

研究分野：宗教学

キーワード：アマルダス 融合思想 ヒन्दウー・イスラム 融和共生 理想の社会的展開

1. 研究開始当初の背景

シク教はインド初の最も新しい世界宗教として、世界に2000万余の信徒人口を有すのみならず、旧大英帝国領土を中心に、世界各地に信徒が展開し、その国際的なネットワークを通じて、インドと世界を結び、貿易の要として19世以降重きをなしてきた。更に、加えてインド国内においても、その活動的な倫理観によって、インドの近代化に大きな役割を果たしてきた。とはいえ、インドにおいて圧倒的に少数派であり、また仏教徒の関わりも薄いために、日本に於いては殆ど研究がなされなかった。この不足埋めるべく、報告者は1980年代初頭に、デリー大学を拠点に、シク教の聖地アムリッサルに在るグルナーナク・大学に留学し、聖地ゴールデン・templ(ハリマンデール)等を中心に、シク教の研究を行い、今日に至っている。しかし、研究の蓄積がない故に、本研究に至るまでの30年間は、主に、シク教の開祖ナーナクを中心に、その思想的背景や宗教的背景に関して、広範な研究を行ってきた。

というもナーナク思想は、シク教の開祖の価値のみならず、当時激しく争っていたヒンドゥー教とイスラム教との宗教的な融和を探求し、実現した故の大きな意義を持っているのである。つまり、互いに相争う宗教エリート、その多くが教条主義者達とはことなる、民衆のシンクレヴェルにおける両教の宗教融和実現のために、ヒンドゥー教やイスラム教という宗教的な垣根を越え、両者の融和共生の道を思想的のみならず、現実的に実現した野が、他ならぬナーナクであった。このシク教の教えは、今尚、宗教、文化、イデオロギーなどの差異により激しく対立する人間社会に、争いとは逆の平和教師のベクトルを生み出す思想的な可能性を提供してくれているのである。

ただ理想主義的なナーナク信仰団体(ナーナクパンタ)だけでは、シク教教団の成立は覚束なかったのである。

つまり、理想主義的なナーナクの小規模な信仰共同体、いわゆる宗教の共同体として組織化し、さらに体液化して拡大させるという難行は、ナーナク時代には達成される、その後のシク教尾宗教指導者に託されたのである。そして、その難行を成し遂げ、やがてパンジャブ地方に大きな影響力を持つシク教団へと成長させた第三代グルのアマルダスに関する研究は、インドでも、勿論、日本では殆ど為されて来なかった。その意味で、宗教学的にも、また宗教間対立を超える融和共生思想を現実社会に展開した最新の世界宗教としてのシク教の基礎研究として、意義のあるアマルダス研究が臨まれたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、シク教教団の思想的形成、発展の背景を明らかにすると共に、ナーナクによって造られた理想教団を形成したアマルダスの思想の意義の検討にあった。さらに、日本ではその存在すら余り知られていないアマルダスであるが、彼の思想を、聖典『グラント・サーヒブ』から、翻訳しその思想の一端を日本に紹介することにある。

さらに、アマルダスのシク教教団の組織化に関しての歴史的背景や思想的な枠組みに関して、できうる限り明らかにすることを目指した。というも、彼の活躍によってシク教団は、発展の基礎を築き、その後シク王国と呼ばれる200年近くに亘りパンジャブ地方に大きな力を持った政教一元の宗教国家の基礎が築かれたのである。本研究では、このようにナーナクはじめアマルダスの思想的な背景や、その構造の一端を明らかにすると共に、宗教国家としてシク教団が成長する基礎がどのように築かれたのかに関して、その一端を明らかにしたいと考えた。

3. 研究の方法

本研究は、上述のように、その重要さ、特に、イスラム教と他宗教との宗教間の対立が激しさをまず21世紀の国際社会に、死恨むとの共生の可能性構築の先例としての思想的な可能性を明らかにする、という現代的な意味があった。故に、ナーナクはじめアマルダスの思想を明らかにするのみならず、その思想的な背景をインド・イスラム、ヒンドゥー教のバクティ運動の両面を明らかにした。その上で、アマルダスの思想を検討するために、彼の代表的な作品の一部を邦訳すること、さらに彼の思想を宗教社会学的に検討し、更に教団として発展してゆくシク教の基礎研究を目指した。その為に、シク教の聖典の検討や、ムガル王朝時代の資料へ検討を行った。

更に、これとは別に、シク教と仏教のインドにおける宗教的、思想的連続性に関して、聖典の語句の文献学的検討も試みた。更に、シク教を生み出したヒンドゥー・イスラム両文明の融合に関して、比較文明学の方法論を用いて、総合的に検討した。

4. 研究成果

本研究の成果は、2019年にナーナクの生誕500年記念の特別講演を、在日インド大使館に在るヴィバーカナンダホールにおいてインド大使列席の特別講演を行ったことに象徴される。さらに、学術的な研究は、業績報告に列記したように、多面的な業績を上げることが出来た。今回特に、シク教の思想背景とアマルダス思想を聖典から翻訳し、紹介できたことは、不十分な訳ではあるが一定の意義を持つものである。又、成果に記載したような著作、論文に曽於成果は結実した。

以下において、その一端を掲載する。更に詳細な研究は、今後随時発表する予定である。

以下成果の一部抜粋

アマルダスの思想

アマルダスに関しては、日本では殆ど知られていない。また、彼の人生に関しても殆ど知られていない。それは、シク教研究に於いても然りである。というのも、彼は九十五才という中世印度というより現在でも非常に長命であって、シク教教団の基礎を築いたが、しかし、その入信は六十才で前後であり、それまでの人生に関しては、殆ど記録がない。つまり、それまでの彼の人生は極普通の庶民であった、とされる。ただ、自らはシヴァ教徒であり、しばしばパンジャブを通過して、カシミールに巡礼したといわれている。その巡礼の途中に第二代グルのアンガド(1539~1552)のシク教コロニーが有り、彼は六十才を過ぎてからアンガドに師事し、十数年仕え、第3代グルを継承した。その後の活躍は、シク教団の基礎を築くものであった。

彼の業績の中で現代的な意味で特記すべきものは、女性の地位向上を明確に、教団の中で組織化したことである。特にイスラム教やその文化の影響の強かったパンジャブにおいて、その主要な生活スタイルであるパルダ(女性隔離)制度を否定し、現代的に云えば男女同権を主張した。それは社会的のみならず、宗教的に実行され、シク教団に於いては女性の宗教指導者の存在が認められた。更に、同様な女性差別の典型であるヒンドゥー教のサティー(妻殉死:夫が無くなり寡婦となった妻を夫の遺骸と共に荼毘に付す。つまり焼き殺す風習。イスラム教徒の侵略以前は、夫婦愛の比喩的表現と見做されていた。しかし、イスラムの侵入を期に、サティーは盛んとなった。特に、パンジャブはじめ中インド一体のイスラム教徒との関わりが強い地域では、宗教的な相違を強調する為に行われた。というのも、イスラム教では離婚・再婚は極普通のことであった。ところが、ヒンドゥー教では、夫婦愛を強調し、女性の純粋性を賛美し、イスラム文化との相違として誇った。そのために、寡婦はサティーされたわけである。しかし、現実には寡婦という社会的な不安定要因を美名のもとに排除するということであったとされる。一方、妻を失った夫は、サティーされることはなく、再婚はふつうであった。この矛盾をアマルダスは否定し、サティー禁止、再婚の奨励をシク教徒に定めた。

更にアマルダスは、シク教団の宗教義務としてランガル(施食堂、自由食堂制度)を定めた。このランガルの制度は、元々インドの布施の習慣と、イスラムの施食の習慣を基礎としているが、これらの対象が宗教的に限定されているのに対して、如何なる宗教、階級にも開かれた施食である、という点が大きく異なる。この制度は、現在でもシク教団の宗教的な義務として、世界中で行われており、シク教のフリーキッチンとして、つとに有名である。ランガルに必要な膨大な経費は、全てシク教徒の寄付である。

シク教教団がこのような事業を展開出来るのは、教団組織が確立されているからである。シク教教団の維持には、ナーナクの時代は共同生活であり、自給自足であった故に大きなもんだとならなかったが、アマルダス時代には、社会背景の異なる多くの信徒が集まり、統率は組織化しなければならなかった。そこで、アマルダスはムガル王朝政府の行政組織とされるミシュルを模倣し、22のマンジュ-(manjis)を定めた。このマンジュでは、教団の維持費(一種の宗教税)が、徴収され、また後にシク教団の聖地となるアムリツサルハリマンデル(通称ゴールデン・テンプル)建設や、その他の寺院(グルドワラ)建設に役立てられた。

また、彼は、ナーナクの宗教的な理想を現実社会に実現するために、積極的に説教し、多くの信者を獲得した。彼の教えの基本は、ナーナク思想をより具体的、且つ分かりやすく展開したことである。

「ラグ・バイルロー」の抜粋

以下においては、アマルダスの思想が最も簡潔に表されているとされる聖典『グラント・サーヒブ』(1128 ページ以下)に所蔵の「ラグ・バイルロー」から抜粋して彼の思想の特徴を検討する。

唯一の神あるのみ。真のグル(サッチグル)の恵みにより、神は理解される。

誰も自らのカーストを誇ってはならない。

真実の神(ブラフマー神)を知るものだけがブラフマンである。

無知なるもの達よ、カーストを誇ってはならない。カースト誇ることは、スミを増すだけである。

人々は四つのカーストがあるという。しかし、全ては神の意志の表れである。

この世界は、一塊の土から(神によって)造られた。

そして最後に人間が、その世界に造られた。
全ての人間は、五つの要素が、合わさって造られている。
誰も一つとして欠くものはないし、また一つとして多いものはない。(全ては平等に造られた。)

ナーナクは仰った。この人間の魂は、人々の行いでけがされる。真実のグルの下でしか、解放は得られない。

ヨーガ行者、在家者、知識階級、宗教者、これら全ての人々は、自惚れの闇に寝入っている。彼らは煩悩の富に酔いしれている。(グルの教えに)目覚めたもののみ、救われる。

真のグルの教えに従うもののみ、救いはある。真のグルの教えに従う者のみ、五つ悪を製することが出来る。

彼は、真実を知り救いに目覚めた者、彼は迷いを捨て、他を傷つけないもの、彼こそ唯一の神の教えに目覚めた者、他者にこびへつらわす、真実に目覚めた者、四つのカーストの則悪から離れた者、彼は生と死から解放される。

ナーナクは云う。真実の知恵に目覚めるとは、病んだ目に目薬をさすようなものである。

神への信心を持つ者は、神の祝福を得て、その恵みを得る。不平を宿す者よ。この世の全ては神の意志の表れで有り、神の意志に即している。この世は神の現れである。神は、この世を即座に破壊し、即座に再生する。

グルのお恵みにより、私は最高の恵みを得ることが出来る。

ナーナクは云う。神はこの世の破壊者で有り、創造者である。

人々よ、迷いの世界に止まってはならない。

私は神の花嫁。私の婿は創造主の神。

神は彼の飾りとして私をお作りになった。それが、神の意志ので、私は神と共にある。

私の身も心も神と共にある。どうして他に心を向けられようか。神は全てにおわします。

(以下省略)

この「ラグ・バイルロー」には、アマルダスの教えの簡潔さと、時にイスラム的な唯一絶対神的な神観念があり、一方でヒンドゥー教的汎神論があり、まさにヒンドゥー・イスラム融合の姿勢が見事に反映されている。

更に、ナーナク以来お伝統でもあるが、シク教では観念的な真理を重視するのではなく、常に現実世界における神の教えの有効性、いわゆるシク教独自の宗教的な倫理的行動とその社会的価値の連動を何より重視した点が、現代に至るシク教徒の倫理観に少なからぬ影響をもたらした。

彼の後、シク教団は巨大化し、ムガル政府の弾圧を受けることとなり、その語平和主義的な教団の思想は、自衛の武力集団として、強力な宗教国家へと歩んで行くことになる。しかし、それでもシク教の原点である平和主義平等主義は、極力守られて行くのである。その歴史的な推移は今後の研究となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 保坂俊司	4. 巻 37巻
2. 論文標題 政治と宗教—インドの事例を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代と親鸞	6. 最初と最後の頁 未定 38頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂俊司	4. 巻 1
2. 論文標題 イスラームとの共生思想の総合的研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 インド的共生思想の総合的研究 釈悟農科研（A）25244003	6. 最初と最後の頁 41-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂俊司	4. 巻 1
2. 論文標題 単著	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宗教と情報	6. 最初と最後の頁 1~212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂俊司	4. 巻 1
2. 論文標題 梵天勸請思想と神仏習合	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア的融和共生思想の可能性	6. 最初と最後の頁 1-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂俊司	4. 巻 1
2. 論文標題 仏教的寛容思想と日本的寛容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア的融和共生思想の可能性	6. 最初と最後の頁 233 ~ 299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 保坂 俊司
2. 発表標題 グローバル時代に日本文明の叡智を発進する意義
3. 学会等名 比較文明学会 第37回 学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂俊司
2. 発表標題 シク教思想の21世紀的意義
3. 学会等名 インド大使館ビヴェーカナンダホール (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂俊司
2. 発表標題 グル・アマルダス思想の基礎的研究
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 保坂 俊司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 318
3. 書名 アジア的融和共生思想の可能性	

1. 著者名 保坂俊司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 213
3. 書名 グローバル時代の宗教と情報――文明の祖型としての宗教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----